

『その日を待ち望む』ピリピ3:17-4:1

3:17 兄弟たちよ。どうか、わたしにならう者となってほしい。また、あなたがたの模範にされているわたしたちにならって歩く人たちに、目をとめなさい。

3:18 わたしがそう言うのは、キリストの十字架に敵対して歩いている者が多いからである。わたしは、彼らのことをしばしばあなたがたに話したが、今また涙を流して語る。

3:19 彼らの最後は滅びである。彼らの神はその腹、彼らの栄光はその恥、彼らの思いは地上のことである。

3:20 しかし、わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。

3:21 彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しい（死ぬべき）からだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう。

4:1 だから、わたしの愛し慕っている兄弟たちよ。わたしの喜びであり冠である愛する者たちよ。このように、主にあって堅く立ちなさい。

●序論

ある引退伝道者夫妻の熱心な働き。

今日賛美した聖歌の歌詞にこうありました。

「タベ雲や来る、空を見れば 主の来たりたもう日のしのばる。ああ、神の前にわれいそしまん。わざやむる時の間近きいま」(聖歌622)

再臨が近い。イエスさまが再び来られる日が来る、その日を待ち望みつつ、今「神の前にわれいそしまん」。”熱心に、心を込めてつとめ励むんだ”と賛美したのです。

そんな姿も思いつつ、今日のところを耳を傾けてください。

●本論

I. わたしにならう者となってほしい

3:17 兄弟たちよ。どうか、わたしにならう者となってほしい。また、あなたがたの模範にされているわたしたちにならって歩く人たちに、目をとめなさい。

ここで指摘するのは、背景に深刻な事情があったということです。

3:18 わたしがそう言うのは、キリストの十字架に敵対して歩いている者が多いからである。

キリストの十字架に敵対して歩んでいる人たちが、しかも「多くいる」と言うのです。

「キリストの”十字架”に敵対する」。それはよく言う、律法主義的な自分たちの功績を誇る人たちもいるでしょう。またはそこにはキリストの十字架を示しながらも、それ以外にもっとよい物があるという風に惑わす人たちもいたことでしょう。

パウロは言うのです。

:18b-19 わたしは、彼らのことをしばしばあなたがたに話したが、今また涙

を流して語る。彼らの最後は滅びである。彼らの神はその腹、彼らの栄光はその恥、彼らの思いは地上のことである。

そういう人たちの思いは、自分基準の正しさ。自分の欲望・願望。すなわちすべて自分が中心であるということです。

そして、獄中からパウロは彼らの行く末を思って涙して訴えているのです。「彼らの最後は滅びである」と。そこにあるのは厳しさではなく、涙です。

その人の心には、あの十字架で人のためにわたしのために死なれた方が入るすきまがないからです。

一方、獄中のパウロは、人から見るならばみじめでした。けれどもそんな彼が、「わたしに、またわたしに倣って歩む人に目を留めなさい」と言います。

それは、ただイエスさまにたよらなければ生きていけない、そんな足りなさ、弱さを認めて生きる姿であったのです。

そんな彼にならう、そんな生き方に倣う人々に、わたしたちは目を向けることの大切さです。

イエスさまは十字架で死なれました。徹底して貧しく、弱く、みじめになられ、わたしたちのすべての罪を背負って、わたしたちのために苦しみ死なれたのです。

聖書は、わたしたちに語り掛けます。

信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。(ヘブル12:2)

イエスさまは、あの十字架上で喜びを経験していました。すべての恥と苦しみを負いつつも、それ以上に、わたしたちの救われる姿を思う喜びを経験していたのです。

だからこういうことができます。

Ⅱ. わたしたちの国籍は天にあります

3:20 しかし、わたしたちの国籍は天にある。

わたしたちの教会の墓石にも、はっきりと「我らの国籍は天に在り」と記されています。

それは目に見える誰かの成功や繁栄の上にある言葉ではありません。

神のひとり子イエス・キリストが人の世界のどん底ですべての人の罪をすべて背負って、鞭うたれ十字架にくぎ付けにされ、ぼろぼろのみじめな姿にされて死んでくださった、あの十字架のゆえに聞く言葉です。

この方は三日目によみがえり、死に勝利をおさめ、そして天にあげられました。

だから逆に言うと、キリストの十字架抜きにして、キリストの十字架に反して、「わたしたちの国籍は天にある」などとは絶対に言えないのです。

そしてだからこそ、ここでは「しかし、(信じる)わたしたちの国籍は天にある」と言い切る告白ができるのです。

わたしたちは死んで後、自分の存在がどこにあるか、そしてどのようになるかを、聖書を通してよく知っています。それをはっきりと明確に表す言葉、今日のこの御言葉です。

II. 再臨の日を待ち望みます

聖書は、わたしたちの国籍を語るだけではない。その先を告げています。

3:20 しかし、わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。

以前、「メメント・モリ」という言葉を紹介しました。

それは「なんじ、死を覚えよ」という言葉です。この言葉を聞く時、わたしたちは、この地上での生涯にいつ終わりがやってくるかわからない。その時のための備えが出来ていますか…と問われるのです。

そして、別名「メメント・モリ腕時計」、自分の人生の残り時間をカウントダウンして示してくれる時計があります。

この地上での生涯を有意義に過ごすための時計ということです。

ただこの時計では、死んでその先のことは示しません。

一方パウロは、その先を見えています。多くの人たちのために涙したのです。

3:18-19 …今また涙を流して語ります。彼らの最後は滅びである。彼らの神はその腹、彼らの栄光はその恥、彼らの思いは地上のことである。

人々の関心は、地上での残された時間をどう楽しみ、また充実させるか…。

それに対して聖書は「しかし」と語ります。

3:20 しかし、わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。

そして、キリスト者に自覚を促します。天の国に確かな望みを持つ者として、この地上での生涯を丁寧に、誠実に生きることを示すのです。

さいごに)

わたしたちの究極の希望は、よみがえりの栄光のからだです。

3:21 彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しい（死ぬべき）からだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう。

イエス・キリストは、十字架につけられ三日目によみがえられた。

このキリストは天に上げられ、再び来られ、そのとき死んだ人もわたしたちもよみがえりの栄化されたからだに変えられるということです。

聖書はまたこう記しています。

1テサロニケ4:13-

4:13 兄弟たちよ。眠っている人々については、無知でいてもらいたくない。

望みを持たない外の人々のように、あなたがたが悲しむことのないためである。

4:14 わたしたちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう。

4:15 わたしたちは主の言葉によって言うが、生きながらえて主の来臨の時まで残るわたしたちが、眠った人々より先になることは、決してないであろう。

4:16 すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、

4:17 それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。

4:18 だから、あなたがたは、これらの言葉をもって互に慰め合いなさい。

この地上で抱える肉体は、年齢を重ねて病を抱え、できていたことができなくなり、弱さを抱えて苦しむこと、ときにはいろいろと忘れてしまうこともあるでしょう。子どもようになってしまい、身近な親族さえ忘れてしまう。それが聖書が「卑しい」と語る体の現実かもしれません。

そのことを認めた上で聖書は語ります。 それでも神さまの側は、イエスさまの側は、決して忘れない。イエスさまを信じた故にわたしはそう確信できます。

3:21 彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しい（死ぬべき）からだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう。

そしてこの約束に立つことで、わたしたちの今が変わります。

その日を待ち望みつつ、「ああ、神の前にわれいそしまん」と。

先ほど読んだ1テサロニケの手紙でも結びは励ましてした。

そして今日のところも結びにこう語られています。

4:1 だから、わたしの愛し慕っている兄弟たちよ。わたしの喜びであり冠である愛する者たちよ。このように、主にあって堅く立って生きなさい。

さあ、わたしたちもこの励ましをお互いに語り合い、分かち合い、その日を待ち望み、いただく望みを告白して生きる者となりましょう。